

# 生存科学研究 ニュース

VOL. 7. NO. 2. 1992. 3. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

## 第2回生存科学シンポジウム 「生存科学における発展」

平成4年1月18日(土)、上智大学講堂において、第2回生存科学シンポジウムが開催された。会は午前9時に始まり、熊谷理事長の挨拶の後、特別講演2題が午前中に、午後は総合討論として、研究所の幾つかの研究会の責任者より話題の提供があり、次いで発表者間での討議と会場の参加者を交えての総合討論が午後五時過ぎ迄行われた。

シンポジウムの内容は、研究誌『生存科学』第3巻第2号(平成4年秋発行予定)で詳細に紹介されるので、ここでは概要だけを紹介する。

\* \* \* \*

開会の挨拶で熊谷理事長は、武見太郎博士がいかにして「生存科学」に到達したかを簡明に述べた。

特別講演の第1席は、千葉県立中央博物館館長で財団法人日本自然保護協会会長でもある沼田真氏による「生態系の多様性と持続性」。

講師は先ず、人間がエコシステムの中で生産者でもあり、消費者でもあり、分解者でもあることを強調した後、自然保護が単なる保護から賢明合理的利用を必要とするという認識に変わったことを説明。持続性については

Sustainable Development といま言われるが、それは矛盾であるとし、持続可能な収穫の最大量という畜産業で使われる概念を披露。また種の多様性に関しては、それがエコシステムにとって大切であるが、それを維持するためには広大な自然が必要であることを説き、バイオエシックスは、医学では生命倫理だが、生態系では生物倫理であり、全ての生命が尊重され、地球環境を良くしておくにはどうしたら良いかを考えなければならぬと結んだ。

特別講演の第2席は、京都国立博物館館長、京都大学名誉教授の藤沢令夫氏が「生きることと良く生きること」と題して講演。

講師は、「ただ生きることより、良く生きることを何より大切にしなければならない」というプラトンの中のソクラテスの言葉を引用して、人はみな幸福を願う、つまり良く生きることを願うのに、それを「しなければならない」と言うことは一見矛盾するようだが、それを考えるには生存科学が必要であるとし、現代が科学技術主導の世のなかになったのはなぜか、精神的価値が排除されてきた科学技術の本性を、西欧思想の根源から考察して説明。人間はこうすれば幸福になれると信じて科学技術を発展させてきたが、今それがそうならないことが分かった。それに全面的に委ねるのではなく、それをうまく使うようになる必要がある、と結んだ。

午後は、先ず「家庭問題研究会」の早稲田大学教授小嶋謙四郎氏が発達心理学の立場から健康と家庭の関わり等を述べ、次いで「東西の健康観・医・薬勉強会」の東京医科歯科大学津谷喜一郎氏が東西に関する認識の混沌たる状況を解説し、最後に「生存と文明研究会」の八千代国際大学教授高瀬浄氏が変革期にある現代への制度派的取組の必要等を述べた後、総合討論が行われた。

第5回 医薬問題研究会  
流通機構とその経済解析

1月27日(月)午後3時30分より、第5回医薬問題研究会が開催され、武田薬品工業株式会社副社長山田裕久委員が、医療用医薬品の流通機構とその経済解析について発表した。

山田委員は、まず、医薬品の流通は複雑だと言われているが総量の90%以上の医療用医薬品の流通経路は実際には単純明快であること、複雑なのは価格形成に関してであることを指摘した後、バルクラインの意味、薬価基準の法的根拠、薬価算定方式、薬価形成過程、メーカーと卸しの関係、販売戦略の歴史的経緯等、健康保険という非市場機構に置かれ、直接生命に関連する製品として特別な立場に置かれる、医療用医薬品の特殊な流通機構の実態を豊富な資料や年表に基づき詳細に説明した。

第5回 家庭問題研究会  
武見先生と家

1月30日(木)午後6時より、第5回(通算第9回)家庭問題研究会が開催された。今回はエーザイ株式会社顧問山岸敦委員が「武見先生と家」と題して発表。

山岸委員は、武見先生が強い関心を示されていた「家」、特に日本の家について考察を加えた。まず明治憲法と平和憲法とを比較

し、その違いが意外に少ないことを指摘。明治憲法下の日本の「家」の理念が、教育勅語を始めとする教育や国家体制によって社会に定着していたと分析。また諸外国の家族観を比較しながら「家」は人間生存の社会構成、時間的、空間的最小単位であるとしたうえで、人間が健やかに生きるためには社会的関係を考える必要があり、医学の社会的適用である医療は、この社会的ということを実際に考える必要があることを強調した。

日本は戦後、平均寿命が30才も延長したが、今後は医療費が高騰する反面寿命の伸びは少ないということになるであろう。その際、個別化の進展するなかで、本来自己の責任のものを社会に広げるということでは無駄が多く、保険財政は破綻する。医療費に歯止めが掛かった時、もう一度家庭が見直されるであろう。それに関連して、「健やかな死は明るいものである」という理解が大切であろう、と結んだ。

研究会の後半は、今後の研究会の方針について小林委員長を中心にフリーディスカッションが行われ、生存研の来年度研究との関係を考え、「人間関係と社会文化」をテーマとして研究を進めることが決まった。研究会の名称も、これまでの「家庭問題」研究会から「人間関係と社会文化」研究会へと名称が変更される予定である。

次回は3月27日(金)午後6時より。上記のテーマでの研究課題を委員が持ち寄り検討する予定。

第2回 東西の健康観・  
医・薬勉強会  
武見太郎先生と東洋医学

1月31日(金)午後2時より、第2回「東西の健康観・医・薬勉強会」が開催され、北里研究所付属東洋医学総合研究所の大塚蒸男所長から、「武見太郎先生と東洋医学」と題しての発表があった。

大塚所長は、東洋医学や漢方に関する武見先生の数多くの資料を提出し、それ等を引用しながら、武見先生が東洋医学や漢方に極めて深い理解を示されていたことを話された。

例えば、武見先生の漢方についての恩師は、先生の患者である幸田露伴氏であると先生自身で言われているが、「東洋医学雑感」のなかに書かれた、「露伴先生は、人間が生命を続けている限り、自身の体内で自己を守るあらゆる複雑な操作が行われているという前提のもとに、それが病人にどのように表われるかということを考え、そして漢方医学は直感の医学として発展したことを話して下さった」という文章は、それが驚嘆に値する漢方に対する深い理解を示すものである、と指摘した。

また、武見先生は日本の西洋医学研究の最先端を進む北里研究所に、東洋医学研究の場を作ることを進められたり、日本が西洋医学と東洋医学の接点としての役割を果たすべきであるとも言っており、西洋医学を専攻し、科学者として科学としての医学の確立を強く目指し、日本医師会会長として日本の医学・医療を推進してきた先生が、同時に漢方に深い理解を示し、その発展に道を開いたということは、大きな意義のあることである、と述べた。

環境・保健・産業問題研 小委員会  
今後の研究の進め方についての討議  
(生存研の研究体制との  
関連において)

2月22日(土)午後2時より、「環境・保健・産業問題」研究会の研究を、研究所のこれからの全研究との関係でどう進めるかについての協議が小委員会で行われた。

会議には、当研究会の委員長、幹事の他、研究所の専務理事、研究担当の常務理事、生存研の全研究の総合解析を受け持つ委員会の責任者等が出席した。

まず、当研究会の向山定孝委員長は、これまでの研究の要約をおこない、そこで指摘された各種の危険要因に関して、特に低濃度、長期暴露の生活環境、自然環境への影響がこれからの重大な問題であり、多くのデータによる正確な疫学調査が必要であると述べ、それには地域医療と産業保健の関係付けが大切であると強調した。

つづいて小平専務理事は、現在生存研が構築しつつある研究体制とその取り組み方について説明し、その中で当研究会の位置付けとその受け持つ役割の重要性を指摘した。

討議のあと、総合解析委員会の鈴木雪夫委員長は、健康政策は自治体がやらなければ厚生省でもどうしようもない問題であり、自治体の健康計画を生存研が助けていく必要があること、そういう実践を通して全国レベルの、あるいは普遍的課題の研究も進むことを強調した。

\* \* \* \*

小平専務理事の説明した、生存研の研究体制とその取り組み方の概要は以下のとおり。

「古典的な閉鎖的枠組を取り払い、『生存』という概念を基点としてあらゆる学問の成果を結集し新しい生存科学を創造確立する」という目的のために、(A)既存の分類に属する科学、哲学、技術を専門的、分科的に追及する研究グループと、(B)幾つかの分野を既存の枠を超えて統合し、生存の理法を導き出す研究グループと、(C)理法を導き出すための専門的総合的な解析を担当するグループと、(D)それぞれの研究グループに現実のデータや知見を提供し、また導き出された生存の理法を適用して検証する実践的研究グループとが協力していく。以上の研究体制は同時に研究への取り組み方を示すものでもある。

当研究会の本質は(B)に属するが、同時に(A)に属する研究も必要に応じて行い、(D)に属する九州プロジェクトにも関係する。

総合解析委員会は(C)に属する。

研究所日報

- 1月10日 常務理事会  
1月18日 九州プロジェクト準備会議  
1月23日 総合保健計画研究会  
同 別府市部長、同医師会長と会議  
1月31日 別府市との共同研究の会議  
同 武見思想の映像化打ち合わせ

健康と経済勉強会  
のお知らせ

お待たせしていた「健康と経済」勉強会が下記の通り開催されます。既にお申し込みの会員は奮って御参加ください。

日時 平成4年3月19日(木)  
午後1時30分～3時30分

場所 生存研 会議室  
テーマ 「日本の豊かさを検証する」

発表者 帝京大学経済学部教授  
江見康一 (座長)

なお来年度は、この勉強会はさらに強化された形で再編成される予定です。

第5回武見国際シンポジウム  
予報

これまで数回にわたり報道してきた第5回武見国際シンポジウムの計画が愈々煮詰まり以下のように決定した。

これまでの予報と多少の変更があるので御注意されたい。

会員は傍聴できるが事前の申し込みが必要

日時 平成4年7月 15日・16日

場所 横浜 国際平和会議場

テーマ 「健康開発にかかわる  
倫理的諸問題」

16日午前:

武見思想のプレゼンテーション  
生存研側からの特別講演  
ハーバード側からの特別講演

15日および16日午後:

武見フェローによる発表と討議

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 門司フェロー

Takemi Seminar

1/6 Prospective Community Studies  
/ M.Garenne

1/13 Meta Analysis / K.Hayashi

1/27 Presentation about book on AIDS  
/D.Tarontola

2/3 Debt-Swaps for Social Purposes  
/S.Chacko

2/10 Demographic and Cultural Aspects  
of Maternal Health Care in North  
Africa /C.Obermeyer

2/24 Environmental Policy in India:  
Strategies for Better Implementa-  
tion / M. Reich

Takemi Luncheon Research Presentation  
Series by Takemi Fellows

1/16 Maternal Mortality in lif-lif,  
Nigeria /F.Okonofua

1/23 The Utilization of Ambulatory Care  
by the Poor in Paraiba,Brazil  
/J.Rodrigues

1/27 Prevalence of Onchocerciasis, and  
the Psychosocial Impact of Oncho-  
cercal Dermatitis on Adolescent  
Girls in Ettoh in Rural Nigeria  
/U.Amazigo

2/13 Time Allocation Pattern of Andean  
Aymara / K.Moji

2/20 Options for Optimal Control of  
Schistosomiasis in Tanzania  
/J.Rugemalila

2/25 Study on Drug Use Indicator in  
Nigeria /Bimo

2/27 Case of Mothers during Pregnancy,  
Feeding and Rearing of Children  
/J.Nguma

Departmental Meeting

2/24 Cost-effectiveness of Chemotheray  
for TBC /C.Murray